

漢法苞徳塾資料	No. 047
区分	診断・奇経
タイトル	奇経脈診について
著者	八木素萌
作成日	

◆奇経鍼法の系譜の問題について

- a. 奇経の体制は『内経』にかなりの大部分が記述され、『難経』で確立された『奇経八脈考』で大幅に前進した上「奇経脈診法」の土台が据えられ、何若愚『子午流注鍼経』（金代）、竇漢卿『鍼経指南』（何の弟子・元代）でほぼ完成され、「子午鍼法」「奇経療法」などと今日言われている鍼法系譜が成立して、『医学入門』（李梴・明）には「周身三百六十穴・統于手足六十六穴 六十六穴又統于八穴 故謂之奇経」「奇経八脈 為要乃十二経之大会也」と言うような把握・位置付けが在るまでになって来ている。此処まで言い切ると『難経』の規定から大幅に離れている感が強い。正経と奇経の関係はまるで逆転しているかの如くである。奇経の脈診法も次第に完成した。
- b. 此処に述べる脈法は『脈理求真』（清・黄宮繡）に記述を土台にし『診家正眼』（明・李中梓）、『四診抉微』（清・林之翰）その他と照合した上で整理したものである。
- c. 『脈語』（呉崑）の追加に関しては、